

サクラノート

extrakaise

サクラノート

あたしの名前がサクラだってことは、あたしが生まれたときに決まったことなんだ。桜が綺麗に咲いた夜に生まれたから、サクラっていう名前。それだけのこと。今思えば、さくらにして欲しかったけど、カタカナでサクラ。まあ、どちらでも、日本語に変わらないから。

生まれる前は、どこかにいて、何かを待っていた。今では、見えないものを知っていた。もう忘れてしまった。冬のうちは知っていたのに、春の夜空があたしを解き放ってしまったんだ。昨日より、今日よりも、今というときへと続く言葉。サクラ。

小さな頃は、目に見えることだけが全てだと思っていたけれど、どうやらそうではないことが、本当のことらしい。手をかざせば、心が遊ぶ。この手の先に見えるものこそが、未来だと思うからか。ご飯をお箸で口に運びつつも、目はどこか先を見ている。あたしは形の無いものこそ本物だと思う。この世界を形作るモノは、モノ。しかし、モノには何かのコトバが付きまとう。それがモノの形を示している。ルールでもないけどねえ。意志とでも言うべきものだろう。語られることのないコトバはあたしをどこかで縛っている。束縛しているんだ。見えていたものは、見えなくなってしまって、見えなかったものが替わりで見えている。少し滑稽だけれど、どこかにある真実の故だろう。この訳の分らない世界にあって、あたしはいつでも願っている。何をだ。世界をだ。昨日が小さくなって、見えなくても、どうにか今があるのは、記憶があるからだ。夕食に何を食べたかは思い出せないけれど、自分が確かに昨日いたことは知っている。だから、それでいい。それで十分。あやふやなイメージを作って、体の中を巡っているんだ。目を閉じれば、浮かび上がる影。ぼんやりとしたその影は、どこかへ解き放たれるんだ。夢と言うのだろうか、それでも、やっぱり記憶なのかな。いつまでも始まらない、言葉が、いつも傍にいる。あたしの側にいつもいるんだ。自由。自由とは、訳の分らないもの。だから言葉として、誰かに言ったとたんに関が違って、輝きが違って来る。自由とは心の中、体の中に閉じ込めていないとね。悲しいかなそれが本当のことだろう。

だれかが言った。世界は答えを求めている。自分でない誰かの為に答えを探している。見えないものを見る力。その果てにある言葉。自由という言葉の意味。生きることは美しい。

右手に美しさを、左手に魅せる力を。手のひらで見る美しさ。それぞれの物語。というよりも、この言葉の少しの違い。手を合わせて、言葉を選んでいく。誰かと同じにならないことを願いながら、言葉を選んでいく。小さな答えはいつも側にいるけれど、どうもあたしを前には歩ませてくれない。結局、歩むのはあたしなのだ。聞こえるのは、いつかの言葉。あたしの体を巡っている。小さなことも、大きなことも、どこまでも遠く、そして近い。全体で一つ、あたしが孤立してあるのではないよ。また一つ、また一つ、答えを探している。あたしは、今という時代に生きている。二十世紀の終わりに生まれ、二十一世紀の始まりを生きている。人は何を選んでいるのだろうか。この時代。情報という言葉は何を指すのだろうか。価値はどこにあるのだろうか。疑問することで迷い、いつかのあたしを思い起こす。あたしが世界を救うのだと、思っていたあたしのことを。幻想のことを。いつの日にか、この世界を知りたい。あたしの中の世界は、一つの仮想世界、ただのイメージに過ぎないの。だから、いつも本当を求めている。近しいものを否定していくことであたしの中に、本当を求めている。ただあたしを信じれば足りる話なのにねえ。どうも、そうはいかないらしい。じぶんのことなのに変だね。良くも悪くも、依存してしまうんだろう。形の無い世界がそこにアルのに。さて、何を信じるのだろうか。この時代にどの答えを示すのだろうか。さあ、答えてみるんだ。世界は・・・救うものなのか。

世界には、つまるところ、地球上の国々、人々には、多くの問題が依存している。争いや、苦

しみが溢れている。環境は悪化し、この先のことなんて予想できない。予想は当たらない。予想なんて、仮想にすぎないから、現実はその通りに、あまくない。社会に生かされ、何の疑問も抱かないことが生きるということだと言う。だれかと同じであることを他者に求め、何故かしら他者もそれを満たそうとする。そういうところにあたしはいるんだ。本物はどこにいればいいのか、忘れないでいたい。どうやって生きていきたいのか、真剣に思わねば。生きていかないとどうにもならないんだよ。真剣に考えないといけないんだよ。同じようにしても、どこかでうまい理屈を並べられて、ごまかされてしまうことは、あたしにとって最悪だ。どこにあるか分らない答え。そう誰かを否定しても始まらない。そうならないように、思えばいいだけだから。あたしはいつも溶けてしまう。いつも忘れてしまう。美しさはこの上にアル。どこかにある言葉。果てにある思い。たぶんいつまでも迷っていたいのだろう。不安の中にいる方が、自分に変化するからね。あたしはいつも何かを思っているんだ。少しずつ変りながら、明日と違うものを見るように。あたしは今どこにいたのだろうか。

むかしね、深く深く潜ろうとしたことがあったんだ。自分の中に、あたしの中に。もう忘れてしまったけど。失ったものは戻らない。失うものばかり。勉強ばかりしていてもなりたいものにはなれないよ。そうだ、何か見失っている。でも何かに慣らされて、見失っていることに不安を覚えない。本当の恐ろしいこと。見えない夢、見える夢。

太陽は今日も輝いている。空にあって、ホシを照らしている。あたしはその太陽を知っている。知っているけど、どうなのだろう。だれかに知らせることはできないだろう。あたしの中にある感覚は、誰に知ってもらえるというのだろうか。なかなか難しそうだ。昨日より、今日より、難しそうだ。深くあたしの中に潜っても、あたしの感覚は、表には出てこない。むしろ、深い所から動かなくなってしまう。悲しいかなそんな現実。手を伸ばして知るのとはそんな現実。どこにいるのだろうか、どこから出てきたのだろうか。見えないものは見えないと言い、知らないものは知らないと言う。それだけではいけないと誰かが言う。嘘やはったりが重要だとか、なんとか。あたしはそんな息苦しいものたちはいらぬ。まったくいらぬね。正直でいたし、素直でありたい。だってそれが一番楽なのですもの。美しいものを見たら、美しいと言う。それだけで、いいではないのでしょうか。そう、それだけでいい。あたしは誰かの様にはなれないの、だから、それでいい。あえて言う。あれは駄目だ。そんなことばかり言ってては駄目だ。語ることもなくともいいけど、どこかにある言葉だけは信じたい。あたしは、あたし、そして、いつものように言うんだ。「世界の果てにあたしがいて、いつか、いつかと、あたしのことを待っているんだ。」そう待っているんだよ。あたしは、ロケットに乗っていかないとけないね。デロリアンに乗って行かないとね。ワーって言って行かないとね。

実感が無い。自分で見たこと、あたしを見たことは、世界であるという実感が無い。サッカーを見て、目の前でボールが蹴られていたとしても、何か実感が無いんだ。新聞やテレビの伝える情報の方がよっぽど実感が沸く。この世界でこんなことがあったんや。ってな具合に。テレビで見るゴールシーンこそが世界だと実感する。でもね、本当は逆なんだろう。目の前で見たサッカー選手こそが世界。テレビで見るのはその一部でしかない。それなのに、あたしはそういうものに慣れてしまって、感覚がおかしくなっているんだろう。だれかの言うことこそが世界で、あたしを見たものは世界でないなんて。こっけいだ。すごくこっけいだ。

でもね。桜は美しいよな。桜は目の前にして見ないと実感なんて湧かないよ。あの感じ。胸が苦しくなる感じ。切ないって言うのかな、そんな感じがとってもいい。生きていて、言葉にしたくなるから。桜が咲いたらね、あたしは一つ年をとるんだ。桜がさいたらね、あたしは、又、生まれ変わるんだ。四季が巡り、一年。繰り返す日々が、すごく、いとおいしい。

終わり。